

國學院大學學術情報リポジトリ

国分寺造営の土木技術と造塔：
相模・武蔵国分寺の堂塔造営順序の復元をめぐって

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 青木, 敬, Aoki, Takashi メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.57529/00000721 |

国分寺造営の土木技術と造塔

— 相模・武蔵国分寺の堂塔造営順序の復元をめぐる —

青木 敬

序言

天平一三年（七四一）三月二四日の国分寺建立の詔によって諸国に建立された国分寺・国分尼寺は、奈良時代の寺院造営を語る上でも不可欠な一大事業であった。国分寺の創建は、天平九年（七三七）前後の疱瘡と飢饉、蝦夷不穏、対新羅関係の険悪などが動機となったとされ、隋唐仏教の大雲寺制¹⁾などが参照されたとみられる。²⁾

国分寺の考古学的研究は、各地の国分寺・国分尼寺の発掘調

査や整備がすすみ、これにともない史料からの研究成果もふまえて、国分寺建立の時期と区分、伽藍配置と規模、堂塔の規模、瓦の生産と供給（瓦当や郡名瓦）、付属施設、国府との関係、国分寺の存亡、定額寺制³⁾のかかわりなど、多様な視点から研究が進展してきた。特記すべき近年の研究成果としては、組織・技術編と思想・制度編の二冊からなる『国分寺の創建』（須田勉・佐藤信編）をあげておく。本稿も体系的に論及された当該書の研究成果に負うところが大きい。

発掘調査の進展にともなう主要堂塔の発掘調査成果は数多く、なかでも出土瓦の研究に注目すべき研究が数多く発表され、

なかでも梶原義実の『国分寺瓦の研究』は、地域単位で造瓦システムを復元し、その成熟度や変遷過程をとらえるといった、古代造瓦組織にまで踏み込んだ議論を展開した労作である。^①

いっぽう、古くから伽藍配置にかんする言及は多いものの、瓦葺きの重い建物を受け止める基壇や地業にかんする検討は、報告書での事例紹介レベルにとどまり、日本古代の土木技術のなかで国分寺堂塔をいかに位置づけるか言及した先行研究はほほなく、建築史以外の遺構の研究はさしたる進展がない。

ところで、国分寺のみならず寺院造営を考える上でもっとも基本的な検討対象は、主要堂塔の造営順序である。伽藍の造営順序は、出土瓦から復元できる例も存在するいっぽう、相模国分寺のごとく塔以外は非瓦葺きだった可能性もあり、^②出土瓦だけで造営順序を復元するには限界がある。

こうした現状を打開しようと、筆者が国分寺塔の基壇構築技術をはじめて論じたのが二〇一二年であった。^③その際筆者は、国分寺塔の基壇や掘込地業に礫を多用する点に注意し、類例の分布が広域であることを勘考した上で、造塔技術が都で伝習された可能性を指摘した。しかしこの時点では、伽藍造営のどの段階で造塔されたかといった造営順序を復元する観点が不足していた。その後、上野国分寺、武蔵国分寺、遠江国分寺、三河

国分寺など、国分寺堂塔の注目すべき発掘調査成果が各地で公にされ、上記課題の解決にむけて検討対象が充実してきたことから、改めて分析と考察をおこなうことにした。

本稿では、前稿でも検討の対象とした塔基壇の構築技術を中心に議論をすすめたいが、基壇が設けられる塔以外の堂宇も少なからず存在するので、こちらも適宜検討を加える。その上で、国分寺の造営・造塔を堂塔の造営順序の復元も含めて考えたい。ただ、全国分寺を対象とするのは筆者の能力を超えるため、本稿では隣接する双方の国で主要堂塔の発掘調査が進展し、かつ基壇構築技術が詳細に把握できる例として、相模・武蔵両国分寺を組上りにのせる。

一 堂塔基壇の構築技術

(一) 掘込地業

堂塔の基壇構築技術を考える上で、地盤改良の一種である地業の方法の理解が欠かせない。一言で掘込地業といっても、総地業や壺地業、布地業とさまざまで、これに地業内の土砂や礫の使用といった要素を加味するので複雑である。そこで複雑な掘込地業の分類をおこない、技術系統復元の一助とする。

A：掘込地業（総地業）あり 基壇直下、基壇平面に近い規模を掘削し、土砂や礫などを用いて埋め固める。国分寺塔の例をみると、総地業をもつ国分寺塔の例は、美濃をのぞき東北地方や関東地方、九州地方など、いわゆる境界領域やそれに近い国に多い。

さて、掘込地業の平面規模は次の三通りに分類できる。括弧内に代表例を付す。

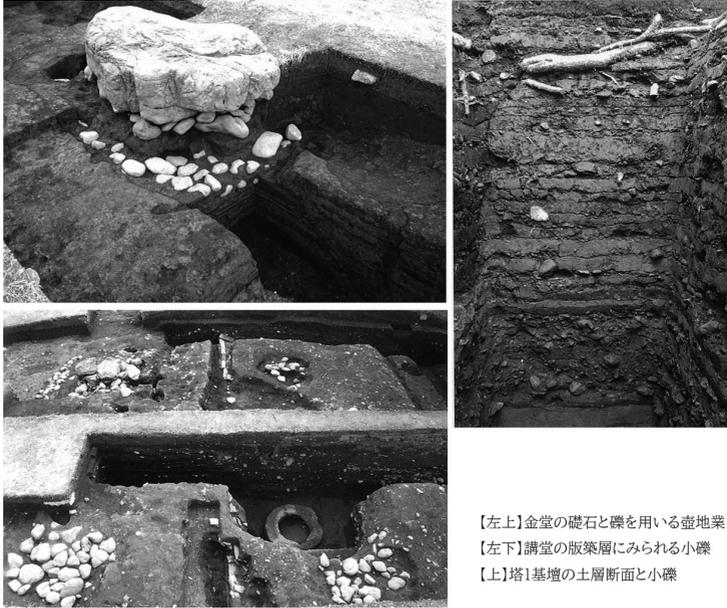
- ① 基壇規模より小さな平面規模（武蔵国分寺塔跡2・美濃国分寺塔）
- ② 基壇規模とほぼ同じ平面規模（武蔵国分寺塔跡1・三河国分寺塔・伊予国分寺塔・筑後国分寺塔）
- ③ 基壇規模よりも一回り大きな平面規模（陸奥国分寺塔・上野国分寺塔・相模国分寺塔・伊豆国分寺塔・遠江国分寺塔）

①は主に塔の本屋を中心とした荷重を意識した施工方法、②は塔本屋だけでなく基壇全体の荷重まで含めて意識したといえるだろう。問題は基壇規模よりも大きな総地業を有する③である。なぜ基壇規模を凌駕する範囲まで掘込地業を設けたのか。

その理由を示唆する例が、七三〇年建立の薬師寺東塔である⁷⁾。基壇と周辺部を発掘調査した結果、基壇より一回り大きな

掘込地業を検出し、掘込地業の縁辺に沿って打ち込んだとみられる小ピット列を検出した。このピット列が掘込地業を掘削する際に範囲を明示したのだろうが、かりに杭間に横木をわたして重ねれば、基壇版築の堰板の役割も果たせる。実際、東塔の創建基壇版築の縁辺部では、半截された創建時の足場穴を検出したことから、基壇を構築する際に現状より一回り大きく版築し、基壇外装を施工する際に外側を現在の規模まで削ったことが確実である。つまり、③は施工段階では②だったが、最終的に基壇端をカットした可能性が高い。これに対し①・②は、基壇版築土をカットする工程を介さずに基壇外装が設置できるため、合理性という観点からは、③と比べてより合理的な基壇築成といえよう。なお、薬師寺東塔基壇では、上記の総地業のほか礎石直下に壺地業を採用するなど、基壇構築にかかる作業量が多く、合理性という観点だけでは説明できず、信仰など他の要因も加味する必要がある。

ところで総地業の規模は大きく、当然のこと掘削土量も膨れ上がる。相模国分寺の掘込地業（総地業）の掘削土量を計算すると、一般的な国分寺塔であれば一五〇〜三〇〇立方メートル前後だが、肥前国分寺塔のみ一〇〇〇立方メートルを超え、相模国分寺はそれに次ぐ八四一立方メートルもの土量がある。ち



【左上】金堂の礎石と礫を用いる壺地業
 【左下】講堂の版築層にみられる小礫
 【上】塔1基壇の土層断面と小礫

図 1 武蔵国分寺堂塔の基壇

なみに八四一立方メートルは、おおよそ直径二〇メートル級の円墳一基分の盛土量に相当する。

B・掘込地業（総地業）なし 堂塔の基壇には、総地業や壺地業などの地盤改良をせずに基壇築成する例も少なくない。平城京の寺院でいえば、興福寺中金堂⁸や東大寺法華堂・東塔などが代表例である。国分寺塔では、備前・美作・伯耆・出雲など、概して西日本の事例に多く、地山削り出し基壇など掘込地業が不要な地耐力を有する地盤に建立したこと、掘込地業が必要な土壌環境でなければ掘込地業を設けないこと⁹などが、近畿地方以西に類例が多い理由のひとつだろう。

C・掘込地業（壺地業） 壺地業は、礎石の直下を壺掘りし、土砂を突き固めるあるいは礫を敷き込むなどして人工的に地盤を強化する掘込地業の一種である。総地業との併用の有無によつて次のとおり二大別できる。

① 総地業（前述のA）と併用する

宮都では、薬師寺東塔⁷・西塔¹⁰・西大寺薬師金堂¹¹（七六四年）、凝灰岩切石使用）、長岡宮大極殿後殿¹²（七八四年以降か、大型礫使用）、平安京の例であれば西寺五重塔¹³などが代表例である。総地業と壺地業の併用は、薬師寺東塔など国分寺創建以前の奈良時代前半から採用されている。

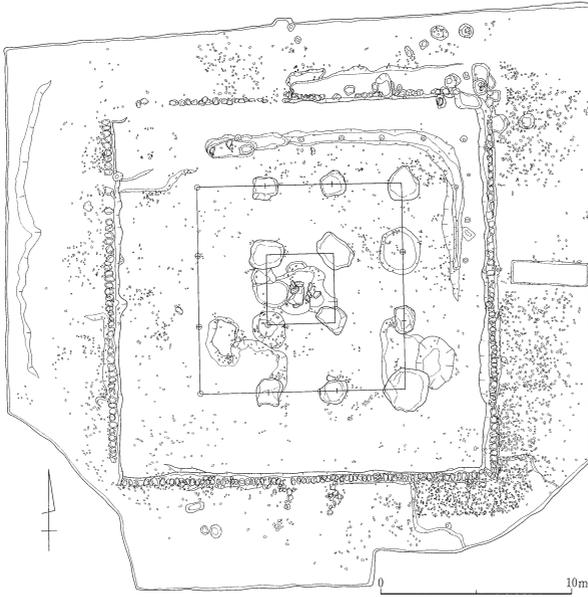


図2 相模国分寺塔の基壇平面図

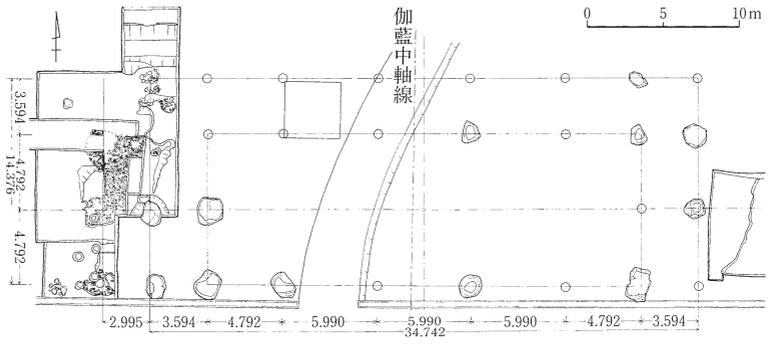
いっぽう、国分寺の例では武蔵国分寺金堂^①があり、壺地業内に大ぶりの磔を使用する（図1左上）。他方、武蔵国分寺鐘樓は壺地業らしき方形のプランがみえるが、根石以外に磔の使用はなさそうであり、大ぶりの磔を用いる例に先行する可能性がある。

② 壺地業を単独で施工し総地業をもたない

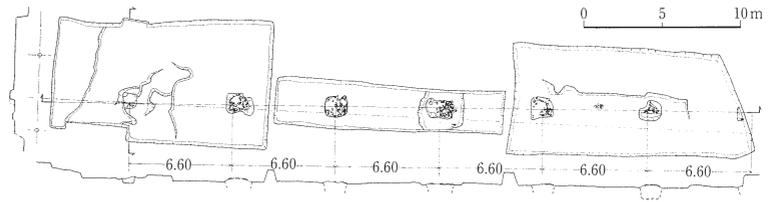
こちらは総地業がなく、基壇も存在しない、あるいは低平な基壇しかもたないなど、基壇構築の簡素化を指向した手法といえよう。宮都の例では、薬師寺食堂・十字廊^②、西大寺金堂院回廊・軒廊^③（七六四年）、大型磔使用）などがある。国分寺の例では、武蔵国分寺中門・僧房、相模国分寺北面回廊東半（図3中）などで、全前二者は壺地業内に大ぶりの磔を多数使用する点が共通する。また相模国分寺北面回廊東半・講堂東側回廊^④は、断面図をみると、また掘り込みが続くことをしめす点線などが壺地業の可能性を示唆するため、壺地業の可能性があるととしておく。

(二) 礎石の据付方法

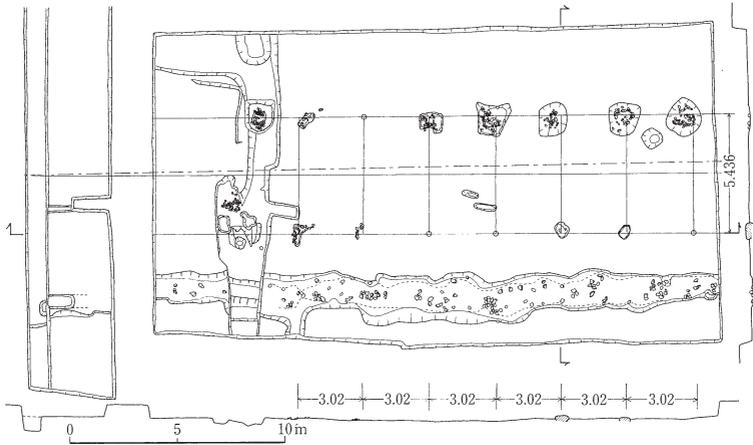
礎石の据付方法は、礎石据付穴をもたずに基壇版築の途中で礎石を据え付け、その後基壇上面まで版築する場合と、基壇上面ないしは基壇築成の途中で礎石据付穴を掘り込み、そこへ礎



講堂基壇と西辺の礎



講堂東側回廊



中門と南面回廊東側

図 3 相模国分寺諸堂宇の平面図

石を設置する場合の二つに分類できる。

Ⅰ 礎石直下にはわずかなくほみ程度で明確な礎石据付穴を
もたず、基壇途中で礎石を設置するもの

七大寺の類例は、東大寺法華堂・東塔¹⁹など、他方国分寺の例では、相模国分寺塔(図2)・相模国分寺金堂(推定)・山城国分寺塔・美濃国分寺塔・筑前国分寺塔などがある。こちらは、下記口に比して基壇上面から礎石据付穴を掘削しない点で効率的な手法といえ、東大寺の堂塔など造営年代が国分寺創建に近い例が多く、国分寺創建の頃に新たな礎石据え付け方法として採用されたと推測できる。ただ、京都ではイと口の出現時期の新旧が指摘できるものの、国分寺創建段階で共存するため、各
国分寺で年代的な前後関係を抽出することはむずかしい。

Ⅱ 基壇上面ないしは基壇築成の途中で礎石据付穴を掘り込むもの

こちらは、飛鳥時代から続く伝統的かつ一般的な礎石据付方法であり、京都の例として、山田寺金堂・塔²¹、薬師寺金堂²²、平城宮第二次大極殿²³、国分寺の例として上野国分寺金堂、武蔵国分寺塔・講堂、相模国分寺南面回廊、伯耆国分寺塔、讃岐国分寺SB5905(推定鐘楼)・僧房などがある。

(三) 基壇・掘込地業と礎

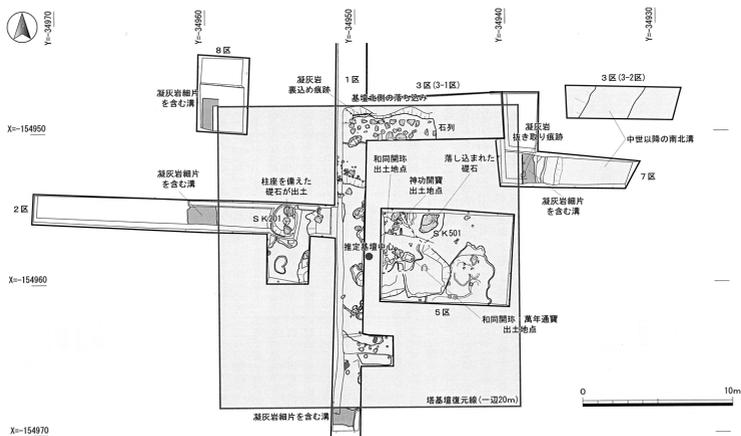
国分寺堂塔の基壇構築技術で最も特徴的なのが、礎の多用である。塔の礎の使用方法は、礎の大きさにより二大別できる。

① 版築層に小礎が混じる

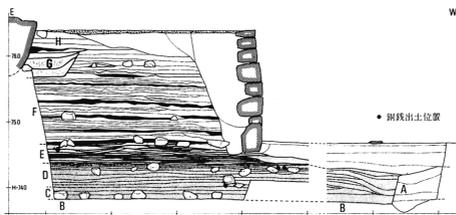
京都の堂塔基壇における小礎の使用例としては、薬師寺東塔・東大寺法華堂・東大寺東塔などがあげられる。薬師寺東塔・東大寺法華堂や平城宮佐伯門など八世紀後半以降の基壇にも認められ、その後も東大寺東塔など八世紀後半以降の基壇にも採用されている。国分寺の例では、上野国分寺塔・武蔵国分寺塔跡1(図1上)・相模国分寺塔・三河国分寺塔・美濃国分寺塔・淡路国分寺塔・肥前国分寺塔などが代表例で、武蔵国分寺講堂(図1左下)をはじめ他の堂宇にも類例がある。これらの例は、都から比較的離れた地域の国分寺に多い。

事例の土層図や土層断面の写真をみるかぎり、礎の厚さが版築一層の厚さに近似する。これは版築締め固めの際、版築一層あたりの締め固めの厚さを礎の厚さに準じたことに起因するもので、礎が締め固め厚のいわばスケールの役割を果たした²⁴。そのため礎の厚さは、版築一層の厚さに近似した数センチメートル程度と薄くなる。

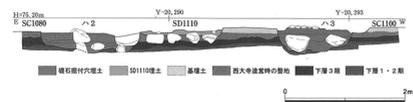
② 版築層の層理面に大ぶりの礎(や瓦・磚など)を敷きこむ



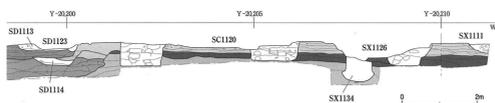
由義寺塔平面図



西大寺東塔基壇・掘地地層断面

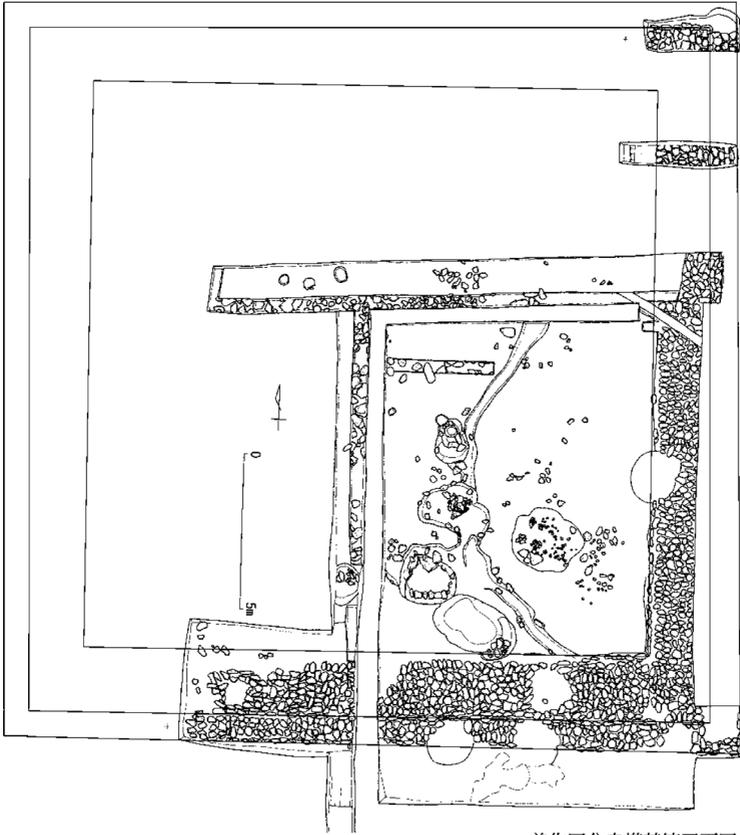


西大寺金堂院回廊SC1080土層断面

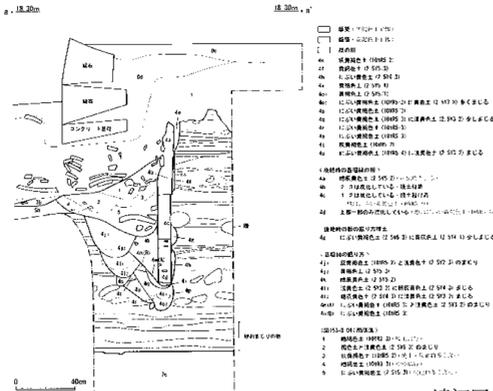


西大寺金堂院軒廊SC1120土層断面

図4 西大寺・由義寺の塔基壇などにみえる大ぶりの礫

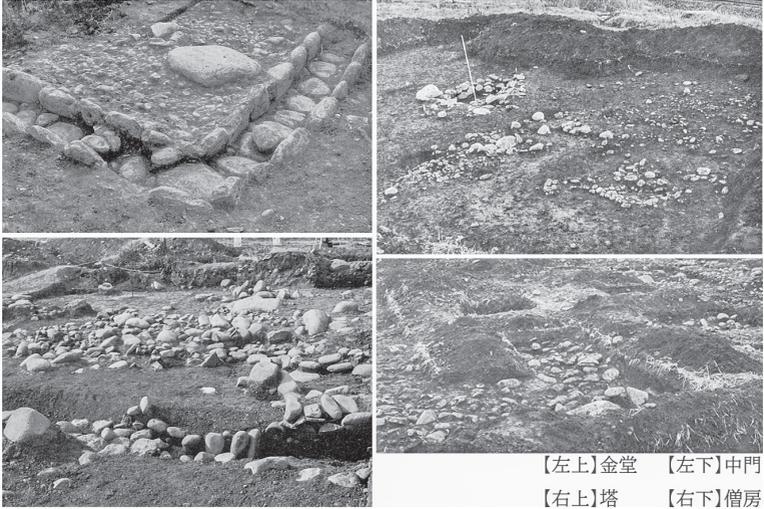


美作国分寺塔基壇平面図



遠江国分寺塔基壇南辺部土層断面図

図5 大ぶりの礫を使用する国分寺塔の例



【左上】金堂 【左下】中門
【右上】塔 【右下】僧房

図6 信濃国分寺堂塔基壇にみえる大ぶりの礫

いっぽう、①にくらべてあきらかに大きな礫を使用する例が存在する。大ぶりの礫を多用して版築に供する土砂の量や締め固めに要する作業時間を節減し、硬質な石材によって堅固な基壇となり、加えて礫の重さによる下層の締め固め効果も期待できるといった利点がある。大ぶりの礫を使用する部位は、基壇版築のみならず、総地業や壺地業など基壇の各所に用例がある。

宮都で総地業に用いる例は、西大寺東塔⁽²⁶⁾、壺地業へ使用する例に同じく西大寺の金堂院回廊や軒廊がある。平城京の近隣地域でも、道鏡と称徳天皇が創建に深くかわり、神護景雲三年(七六九)の西京の設置にともない整備をすすめた大阪府由義寺塔基壇に類例がある⁽²⁷⁾。国分寺での類例は、先述した武蔵国分寺金堂のほか、相模国分寺講堂(基壇西側、図3上)、甲斐国分寺塔・金堂(基壇)、信濃国分寺塔・金堂・講堂(いずれも基壇)、遠江国分寺塔(掘込地業、図5下)⁽²⁸⁾、但馬国分寺塔(基壇)・美作国分寺塔(基壇、図5上)などがあげられる。なお信濃国分寺は、尼寺含め、ほとんどの堂塔で大ぶりの礫を多用し(図6)、同じ国分寺の堂塔でも礫や地業の有無など多様な様相を示す他の国分寺とことなる特徴をもつ⁽²⁹⁾。

②の技術的系統 さて、②の技術的系統について簡単に説明すると、②は倭と新羅との関係が密接になる7世紀後半に、新羅

から日本列島へ導入された技術と考えられる。ただし当時採用された例は、奈良県和田庵寺塔や岐阜県弥勒寺金堂、山梨県寺本庵寺など少数かつ官大寺に採用されなかった。日本列島へ導入された時点で②は、各地で寺院造営が盛行する七世紀後半末、寺院分布の拡大に際して一部寺院で採用した基壇構築技術とみなしうる。²¹⁾ 続く奈良時代前半の例は稀だが、奈良時代後半になると、天平宝字九年（七六五）に創建された南都七大寺に列せられる西大寺の東塔に採用され、金堂には壺地業に凝灰岩切石、金堂院の回廊や軒廊には壺地業に大ぶりの礫を入れるなど、西大寺の伽藍造営に際して多用され、これに呼応するように各分寺にも採用される。

礫を多用しない例とその評価 いっぽう、陸奥国分寺塔、下野国分寺塔、筑後国分寺塔など、基壇構築に際して礫をほとんど用いない塔基壇も少なからず存在する。つまり土砂のみで基壇版築をおこなう例だが、その評価についても言及したい。

右の三例の共通点は、いずれも国分寺造営に先行して陸奥国では多賀城庵寺、下野国では下野薬師寺、筑後国では観世音寺など、国分寺造営前に大規模な寺院造営を経験した地域である。これらの寺院の堂塔では、礫を用いる版築はほとんど存在せず、飛鳥寺にはじまる飛鳥時代の官寺や藤原宮の殿舎などの版築に

通有な土砂のみで版築する技術が用いられる。要するに、上記三カ寺の塔基壇では礫を多用しない点が共通し、国分寺造営以前に飛鳥時代の技術による基壇築成を経験した地域では、その技術を引き継いで国分寺造営をおこなったと理解できる。²²⁾

多様な技術が介在する諸国分寺の評価 ところが、上記国分寺では基壇版築に一切礫を用いないかといえば、あながちそうとも限らない。下野国分寺では、塔基壇の版築には少量の小礫しか混じらないのに対し、金堂では礫を多用する。²³⁾ その理由は何か。

この疑問に対し示唆を与えてくれるのは、国分寺と官衙との関連である。上述した礫を多用する版築による地業の例は国分寺にとどまらず、官衙の正倉にも認められる。下野国の官衙では、河内郡衙とされる上神主・茂原官衙遺跡、多功遺跡、那須官衙遺跡（那須郡衙）などで瓦倉が採用される例が散見され、重量がかさむ瓦葺き建物を支える地盤改良として礫を版築を用いた地業が設けられる。²⁴⁾ 大橋泰夫の研究によると、これらの造営時期はいずれも国分寺創建前後と考えられ、国分寺造営にかかる技術伝習とともに官衙にも援用したと予想できる。つまり、礫を多用する技術が国分寺造営のある段階で導入されたとみるならば、先の礫を用いない版築がすでに存在し、まずは礫を使用しない版築技術で造塔し、その後礫を多用する技術を導入し

て金堂を造営したのではないか。つまり、地業や基壇版築における大ぶりの礎の使用・不使用は、国分寺の伽藍造営の時期差を示す可能性が高い。

ここまで基壇構築技術を分類し該当例を紹介してきたが、その特徴は、基壇構築技術の多種多様さが顕著という点につきる。またこの多様さは、国分寺の伽藍造営が長期におよんだこと、長期にわたる造営を早く完了するため、造営期間の途中で宮都の大寺院に採用した新規の技術を各国分寺が導入した時期差とみる。つまるところ、国分寺造営には技術移転をとまなうとの理解に立つが、はたしてこれが妥当なのか以下で考えたい。

(四) 技術移転とその年代

七重塔の造営は、ほとんどの地域で経験がなく、国分寺創建以前より伝わる造寺技術によって造営できた地域がごく限られる。先にのべた大ぶりの礎を用いる基壇や地業の例は、但馬・美作・遠江・甲斐・信濃・相模・武蔵の諸国分寺と広域に分布し、特定地域に偏在する傾向がみいだせない。なおかつ国分寺造営という造営時期が重複する事業のため、時期が下るにつれ分布が拡大するという伝播論的な文脈では説明できない。

以上の点をふまえ、斯様な分布をしめす理由をもとめると、国分寺造塔をはじめとする堂塔の造営に際し、各地に技術移転

をはかった結果と解するのが穏当である。つまり、工人が造営の現地へおもむく、あるいは伝習というかたちで技術が各地に伝わり、造塔や堂宇を造営したと理解するのが合理的である。

技術移転をもって造塔されたとみる以上、国分寺造塔に不可欠な技術を保持していたのは、七世紀代から百済大寺や大官大寺などで巨塔の造営を経験し、国分寺造営が本格化した時期にはば並行して、東大寺や大安寺の七重塔を相次いで建立した宮都以外にない。要するに、南都七大寺の造寺技術が各地に移転したことで、国分寺造営の技術を確保したといえる。

以上の理解に立つと、国分寺堂塔の基壇構築で特徴的な技術が、南都の各大寺の堂塔創建年代をさかのぼる可能性は低いと結論づけられる。すなわち、国分寺で採用された技術は、類似する大寺の堂塔の創建年代以降となる公算が高い。そこから、薬師寺東塔や東大寺法華堂など国分寺創建以前から存在していた技術、すなわち総地業を有する例や地山削り出しの例(一)・(二)・A・B)、壺地業でも礎を用いないもの、あるいは基壇上面から掘り込む礎石据付穴や基壇版築の途中で礎石を据え付ける技術(一)・(二)・C①かつ(一)・(二)・イ・ロ)などは、国分寺造営開始当初に技術移転がおこなわれた可能性がある。基壇版築層に小礎がはさまる例(一)・(三)・①)も既存の技術である。

いっぽう、天平宝字九年創建の西大寺に採用された大ぶりの磔を用いる技術（一（三）②）や、基壇をもたないあるいは低平な基壇で壺地業する例（一（一）①—C②）は、天平宝字九年をさかのぼる可能性が低い。これらを加味し、上記国分寺堂塔の基壇構築技術は、どの分類に該当するか明示できれば、造営開始年代の上限がもとめられる。この理解にもとづき、次章では国分寺造営時期を区分し、いずれの時期に各堂塔を造営したのか検討する。

二 基壇構築技術からみた堂塔の造営時期

（一）造営時期の区分

先行研究で、国分寺の造営時期は数時期に区分され、各時期の評価は、考古学と文献史学との間で一部意見の相違があるものの、区分自体に対する異説はほとんどなく、筆者も異存ない。そこで、本稿でも先行研究の区分を踏襲した時期区分案を採用する。

まず、現今の国分寺研究の到達点である須田勉による国分寺の諸段階は、次にしめすとおりである。⁽³⁶⁾

I期 天平九年（七三七）から天平一三年（七四一）二月

二四日の国分寺建立の詔まで

II期 国分寺建立の詔から天平一九年（七四七）一月七日の国分寺造営督促の詔まで

III期 国分寺造営督促の詔から天平勝宝八年（七五六）五月二日の聖武太上天皇崩御までIV期 聖武太上天皇崩御から天平宝字八年（七六四）九月一八日の惠美押勝の敗死まで

V期 天平宝字八年（七六四）九月二十日の道鏡大臣禪師就任から宝龜元年（七七〇）八月二一日の道鏡失脚まで

つぎに本稿の時期区分だが、右の須田の区分は、国分寺建立の詔以前からの造寺活動もふまえた知見で、かつ史料との関連性も担保されており、本稿もこれにしたがう。ただし、本稿では国分寺造営における基壇構築技術を主たる検討対象とし、現存する基壇や掘込地業の遺構を取り上げる。そのため、基壇の証左が得にくい国分寺建立の詔以前の時期設定は見合わせ、詔以降を区分の対象とし、須田のいうII～V期をそのまま1～4期と読み替える。

1期 国分寺建立の詔からの数年間、具体的には天平一三年から天平一九年までをさす（須田II期）。各国司に造営事業を一任して造営をすすめることとなったが、造営事業の進捗状況

は芳しくなかった。

2 期 天平一九年一月七日、国分寺造営督促の詔をうけ、国司から郡領層を中心とした造営体制に移行した時期である(須田Ⅲ期)。1・2期では、一(一)で説明したAに加え、一(二)のイないしは口、すなわち南都の大寺や、天下総国分寺たる東大寺塔の基壇構築技術を伝習したと考えられる。この段階までは塔の建立を優先したとみられる³⁷⁾。

3 期 天平勝宝八年五月、聖武太上天皇が崩御し、6月、忌日までに丈六仏と仏殿の造営を急ぐように督促がだされ、造営が遅れていた国々に工人を派遣し、造営事業の推進に拍車がかかったとされる段階をさす(須田Ⅳ期)。3期になると、上記督促の内容からみて金堂整備が最優先された。武蔵国分寺金堂にみられる一(一)のC①などが技術として移転したと推測する。なお3期は、天平宝字八年九月の恵美押勝の敗死までとする。

4 期 天平宝字八年九月、道鏡が大臣禪師に就任し、造下野薬師寺別当として配流される宝龜元年八月までの時期を4期とする(須田Ⅴ期)。道鏡政権下における造営継続、西大寺・西隆寺・法華寺や、出身地である河内国若江郡所在の由義寺の建立に注力した時期で、これら寺院の基壇技術が各地に移転し

たと推測する。具体的には、西大寺の基壇構築技術である大ぶりの磔を用いる版築、すなわち一(三)の②や、壺地業に大ぶりの磔を用いる場合が多い一(二)のC②のうち、総地業と併存しないものが技術移転したとみる。なお4期の国分寺では、造塔が再び優先するといわれる。

(二) 事例の帰属時期

対象遺構をそれぞれの時期に該当するか判断するにあたっては、基壇構築技術から関連性が強く示唆され、かつ建立の年代が判明している南都七大寺の堂塔との対応関係を重視した。その結果を整理すると、次のとおりとなる。

1・2期の例 まず、国分寺堂塔の基壇で特徴的な要素は、磔の使用である。前章でのべたとおり、磔の大きさに応じて二大別できることがあきらかだが、小磔が混じる例は、薬師寺東塔や東大寺法華堂など、国分寺造営以前に建立された南都七大寺の堂塔ですでに採用されており、国分寺造営開始後の東大寺東塔にもみられる。つまり版築一層の厚さにほぼ相当する厚みを有する磔を版築によって突き固める際のスケールとした技術は、国分寺造営開始時点で既存であったことが確実で、国分寺造営開始当初から各地の国分寺に採用されたとみても時間的な齟齬はない。以上のことから、小磔が混じる版築を有する基壇

や掘込地業は、国分寺造営開始の段階で採用したと判断する。⁽³⁸⁾

国分寺塔では、上野国分寺・武蔵国分寺（塔跡1）・相模国分寺・三河国分寺・美濃国分寺・淡路国分寺・肥前国分寺などが該当する。ただ、以上の塔が1期から工事着手したのか、あるいは2期の督促の詔によって着工したのか特定が困難なため、現状ではこれらを1期ないし2期の例としておく。

4期の例 つぎに、国分寺堂塔の基壇で特徴的な要素は、層厚のスケールではなく、その重さで版築の締め固めが期待された大ぶりの礫をふんだんに使用する例である。このうち基壇や掘込地業（総地業）内に大ぶりの礫をいれる例は、南都七大寺でみると西大寺東塔しかなく、基壇構築などの技術が伝習されたとの立場をとる以上、国分寺塔での類例は西大寺東塔以降の所産となる。西大寺の造営開始が天平宝字八年であるから、国分寺の類例は、時期をもっとも引き上げたとしても天平宝字八年以降の所産となる。国分寺塔の例でいえば、甲斐国分寺・信濃国分寺・遠江国分寺・但馬国分寺・美作国分寺が該当し、これらの造営は天平宝字八年以降、つまり4期と推測できる。

また、大ぶりの礫をふくむ例は、基壇や総地業だけでなく、壺地業にも存在することを先に指摘した。南都七大寺のうち壺地業に大ぶりの礫を含む例のうち、前章でC②とした例、すな

わち明確な基壇版築をとまわらない、あるいは低平な基壇しかない壺地業の例は、南都七大寺でみると金堂院回廊・軒廊で存在が確認できる西大寺以外にない。したがって国分寺における類例も天平宝字八年以降、すなわち4期の所産とするのが穏当だろう。すなわち、本稿でとりあげた国分寺の例では、武蔵国分寺中門・武蔵国分寺僧房・相模国分寺講堂・相模国分寺北回廊東半が該当する。

3期の例 さて、もうひとつ特徴的な総地業と壺地業が併存する例だが、南都七大寺の例をみると、こちらは薬師寺東・西塔に代表されるように国分寺建立以前から採用されていた。国分寺では武蔵国分寺金堂・鐘楼が該当し、これまでの手続きに則るならば国分寺造営開始当初から存在した技術と位置づける。ところが武蔵国分寺金堂では、壺地業内に大ぶりの礫を敷き詰めることから、こうした例を国分寺造営開始当初の時期まで引き上げることには躊躇せざるを得ない。つまり、壺地業内の礫を造営当初より後出する要素と評価するならば、その時期を引き下げるのが適切だろう。ただ、武蔵国分寺金堂の造営を先述したC②のごとく、七六四年以降まで引き下げるのが妥当とまで確言できない。というのも、天平勝宝八年五月の聖武太政天皇の崩御を契機とし、翌六月に忌日までに丈六仏と仏殿の造営を

急ぐよう督促し、造営が遅れていた一部国分寺の金堂造営に拍車がかかり、この時期に造営した可能性が否定できないためである。

以上のことから、武蔵国分寺金堂の建立年代は鉄案が得られず、4期の造営も念頭におきつつ、如上の天平勝宝八年から天平宝字八年までの間、つまり本稿でいう3期に武蔵国分寺金堂ならびに鐘樓が造営された可能性を指摘するにとどめる。

(三) 4期の造営を認める年代的根拠

史料から国分寺造営を考察した川尻秋生は、国分寺造営督促の詔を契機に国分寺造営がすすみ、天平勝宝八年の督促からほどなくして造営が完了したとする評価、つまり3期で竣工したとする理解を再検討すべきと指摘する⁽⁹⁾。いいかえると、国分寺の造営が4期にもなお続いていた可能性が高いことを川尻は暗に主張するが、この主張の当否について、考古資料から導かれる国分寺造営年代の成果から考察したい。

信濃国分寺の瓦 信濃国分寺を特徴づける軒瓦のひとつに6734C型式軒平瓦がある。山崎信二によると、当該軒平瓦は西隆寺所用瓦の候補とされ、西隆寺で最も出土量が多い軒平瓦6761Aとの年代的対応から、神護景雲三年(七六九)以降に位置づけられるという⁽¹⁰⁾。つまり山崎は、道鏡の全盛期であ

る本稿の4期に信濃国分寺が造営・完成したと理解する。これに対し須田勉は、天平一九年と天平宝字元年の二度にわたる国分寺造営督促の詔を経て、国分寺は全国的に完成の域に達したとする立場から、本稿の3期で造営が完了したとする⁽¹¹⁾。しかし、信濃国分寺の造営を3期以前にひきあげる考古学的な例証が弱く、信濃国分寺で少なくとも瓦葺きの堂塔は、七七〇年を前後する時期、すなわち4期に造営が本格化したと理解するのが適切である。

さて信濃国分寺は、塔・金堂・講堂・中門などの基壇に大ぶりの礫を多用する点で基壇構築技術がほぼ統一され、堂塔によつて異なる基壇構築技術が用いられる他の国分寺とはことなる特徴をもつ。それにとどまらず、信濃国分尼寺の金堂・講堂も国分寺と同様の大ぶりの礫を敷き詰めた基壇である点が可能し、国分寺・国分尼寺がほぼ同時期に集中して造営された可能性が高い⁽¹²⁾。基壇に大ぶりの礫を用いるのは、4期に該当すると先に説明したが、基壇構築技術が堂塔で共通することが、信濃国分寺を考える上で見逃せない特徴となる。つまるところ信濃国分寺・国分尼寺は、他の国分寺よりかなり遅れて4期以降に主要堂塔の造営が本格化したとみなしうる。

美作国分寺塔の軒瓦 美作国分寺塔も基壇内に大ぶりの礫を敷

き詰め、これが4期の特徴と先にのべた。美作国分寺塔の主たる軒瓦の組み合わせは、軒丸瓦Ⅱ型式と軒平瓦Ⅰa・b型式であり、その年代は奈良時代末〜平安時代初頭にもとめられる。⁽⁴³⁾

遠江国分寺塔の軒瓦 遠江国分寺塔は、出土瓦からまず金堂・南大門を造営、つぎに塔の造営が始まったようだが完成が遅れ、創建期よりも後の第Ⅱ期でも後出する軒丸瓦C2類、軒平瓦H類⁽⁴⁴⁾が多い。続く第Ⅲ期が九世紀第一四半期のため、軒丸瓦C2類、軒平瓦H類は八世紀後半〜末の年代幅におさまるだろう。遠江国分寺の造塔時期が4期まで下れば、木装基壇外装の採用も遅滞する造塔に対応するため、調達の容易な素材で安価かつ簡便な仕様としたのかもしれない。⁽⁴⁵⁾加えて木装基壇外装は、羽目板を基壇上面付近の高さまで設置した場合、羽目板自体が基壇版築の堰板の役割を果たすことも原理的に可能である。つまり基壇版築の工程に並行して基壇外装も設置できることが、木装基壇外装の利点であり、工期の圧縮が期待できる。これらから、素材の脆弱性には目をつむってでも国分寺の造営を完了させたと思起するのは、言葉が過ぎるだろうか。

但馬国分寺 但馬国分寺は古く塔が発掘調査され、平面図をみるかぎり基壇上面に大ぶりの礫が散見され、その分布は礎石周

辺のみならず礎石からはなれた位置でも認められる。基壇内部については不明だが、基壇上面の状況からみてこれら礫の一部は、基壇版築の際に用いられた大ぶりの礫と推測できることから、既述のとおりその特徴から4期の所産だろう。

『続日本紀』巻第一九、天平勝宝八年（七五六）一二月二〇日に、但馬ほか二六国に、聖武太上天皇一周忌齋会の莊嚴具に宛てるため、灌頂幡一具・道場幡四首・緋綱二条を頒ち下したとある。この頃、但馬をはじめとする諸国分寺がほぼ完成したとの評価もあるが、寺院として機能したことと伽藍全体の竣工は必ずしもイコールとならない。唐招提寺は、屋瓦から金堂の竣工が奈良時代末〜平安時代初頭まで下るが、寺院としては天平宝字三年（七五九）に開かれたことからみても自明だろう。

なお但馬国分寺では、寺城南東隅で一括廃棄されたとみられる木簡が三六出土し、一部に紀年のある個体が含まれる。⁽⁴⁶⁾紀年は天平神護三年（七六六）、神護景雲二・三年（七六八・七六九）があるが、いずれも本稿の4期以降に属する点が示唆的である。

以上、出土遺物の年代を瞥見し、掘込地業や版築に大ぶりな礫を入れる例は、伝習による技術移転と、その際西大寺の造営技術を伝習したとの推定に立つ以上、大半が西大寺造営の時期

に該当する4期まで下るとみてよい。少なくとも信濃・遠江・三河・但馬国分寺の造塔は、4期以降とするのが妥当だろう。⁽⁴⁷⁾つまり、国分寺伽藍の完成は4期以降に下る例が少なからず存在すると判断できることから、先の川尻の指摘を是とした。⁽⁴⁸⁾

三 相模国分寺・武蔵国分寺の造営順序の復元

これまでの検討結果をふまえ、相模国分寺・武蔵国分寺における主要堂塔の造営順序を復元すると以下のとおりとなる。

相模国分寺 1・2 (図7①) …塔(総地業、礎石据付イ、礫①)・金堂(地業不明、礎石据付イ) ↓ 3期 (図7②) …南面回廊(礎石据付口) ↓ 4期 (図7③) …講堂(基壇の一部で礫②)・僧房(礫②)・北面回廊東半(壺地業、礫②か)

武蔵国分寺 1・2期 (図8①) …塔跡1(総地業、礎石据付口、礫①)・講堂(総地業、礎石据付口、礫①) ↓ (3期か、図8②) …金堂(総地業礫なし・壺地業礫②)・鐘楼(総地業、礫なし) ↓ 4期 (図8③) …中門(礫②)・僧房(礫②)

なお武蔵国分寺金堂や鐘楼の総地業は、ともに礫をほとんど使わず、金堂の壺地業には大ぶりの礫を多用し、基壇版築層に多数の小礫がある塔跡1や講堂と大きくことなり、これを時期

差に帰納した。つまり、総地業から壺地業へ、加えて小礫から大ぶりの礫へ変遷をとげたと理解した。

造営順序の評価 これらを概括すると、相模・武蔵両国分寺の塔は、遅くとも2期までには造営に着手したと推測できるが、⁽⁴⁹⁾伽藍全体の整備は少なくとも4期まで下ると考えられ、伽藍造営は三〇年前後と長期間におよんだ。⁽⁵⁰⁾また両国分寺は、伽藍造営の早い段階での造塔が共通するが、他の堂宇は造営順序がちがう。要するに、国分寺建立の詔にしがい、まず国の華たる造塔から開始したが、金堂の造営も造塔にあわせた相模と、金堂ではなく講堂や鐘楼の造営から開始した武蔵とでは、伽藍整備計画がことなっていた。

また、先の検討結果からみて、相模・武蔵とは造営計画を異にする国分寺も少なくない。信濃国分寺のごとく伽藍全体の整備が遅い例、他の堂宇の造営が先行し造塔が遅れる遠江、但馬、美作などの諸国分寺が最たる例である。国分寺建立の詔にしたがい造塔を優先した地域もあれば、仏殿をはじめとする堂宇をまず整備して、仏事や齋会への供用開始を重視した地域もあったのだろう。いずれにせよ、国分寺伽藍の造営が長期におよんだことに変わりはない。

国分寺基壇構築技術の変遷とその評価 最後に、基壇構築技術

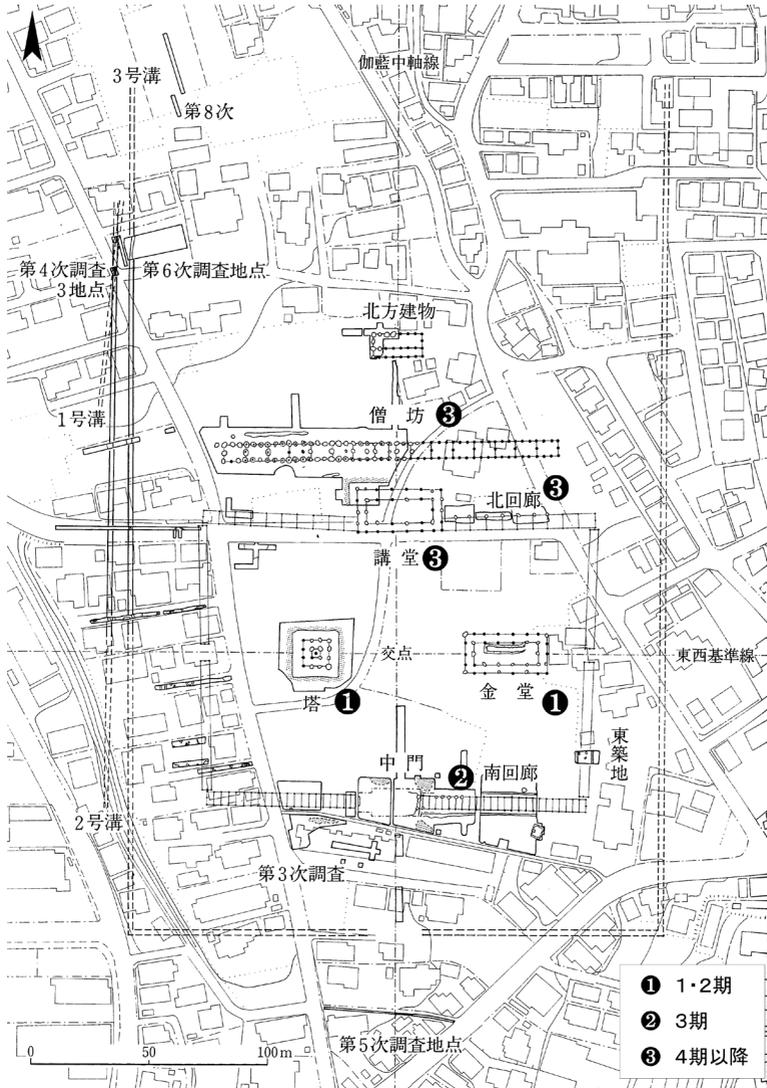


図7 相模国分寺の伽藍造営順序

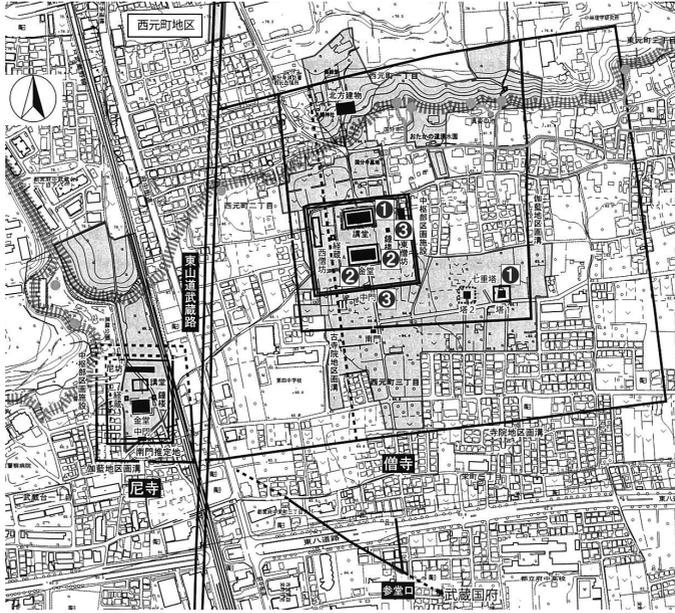


図8 武蔵国分寺の伽藍造営順序

の変遷について筆者の評価をのべる。

大ぶりの礫を投入することで土砂の節減だけでなく、礫の重さによる締め固めに一定の効果が期待できることは容易に察しがつく。斯様な理由から、造塔で膨大な時間を要し、造営事業による負荷を幾許かでも軽減し加えて遅滞する伽藍整備を急ぐため、技術的工夫に礫を多用する壺地業（礫多用）や基壇版築を導入したのではないか。急ぎ伽藍整備するという事情は、本稿の4期に造営がはじまる西大寺でも同様だった。西大寺で多用された大ぶりの礫を使う基壇構築技術は、造営が遅れていた地域に伝習など技術移転によって共有することで同一技術が広域に分布するようになった。

以上の点から、4期つまり道鏡政権下では、平城京で西大寺や西隆寺、法華寺や由義寺、造営が遅れていた諸国の国分寺の造営が急がれ、広域で寺院整備を推進したと考える。

結 語

本稿における分析結果ならびに考察の要点は、以下のとおりである。

- ① 相模国分寺の造塔は、基壇築成以前に横穴式石室墳一基分

の土砂掘削工と盛土工が見込まれ、これに加えて基壇版築土の掘削と締め固め、重量のかさむ礎石の採集・運搬、膨大な木材の調達・運搬・加工と瓦の生産・運搬、相輪をはじめとする金属製品の製作や造仏を勘案すると、莫大な金額と労力が投じられ、その造営は容易ではなかった。

② 総地業・壺地業、基壇版築と掘込地業にみられる礫の大小といった諸属性から基壇構築技術を分類し、これらの組み合わせの違いが、国分寺造営にともなう土木技術の伝習といった技術移転の時期差に起因するととらえた。つまり国分寺造営に端を発した技術移転は、諸国で難渋する造営をうながすため、数次におよんだと推定した。また、国分寺造営に用いられた基壇構築技術は、その共通性から官大寺の基壇構築技術が移転したと理解した。

③ 相模国分寺の塔と金堂は、それほど間を置かずに建立したとみられる。塔・金堂の竣工後、回廊などの建設に着手し、さらにそのあと講堂や僧房を造営したと推定した。他方、武蔵国分寺では伽藍中枢の北側の堂宇とそこから離れた塔跡¹から造営をはじめたらしい。

④ 国分寺では、4期すなわち天平宝字八年以降にも造塔の例があると結論づけた。すなわち、道鏡政権下において国分寺

造営事業が再度本格化した可能性が高く、道鏡政権の仏教政策の評価が欠かせない。

⑤ 国分寺伽藍の完成には相当な時間を要したが、伽藍の完成にいたるまで国分寺では、いかなる運用をおこなったか、いかなれば仮設的な仏堂などが存在した可能性も念頭におく必要がある。

出土瓦の研究だけでなく、本稿でしめした分析視座などを用いて、国分尼寺も含めた国分寺の造営過程が全国レベルでありかになれば、国分寺建立の詔や督促の詔にかぎらず、道鏡政権における寺院の整備推進と国分寺造営に与えた影響など、より多面的に国分寺造営や造塔の評価が可能となろう。

【付記】

本稿は、二〇二一年一月一三日に開催した史跡相模国分寺跡指定百周年記念講演会での講演内容の一部を原稿化したものである。講演に際し、海老名市教育委員会ならびに奈良文化財研究所から資料提供ならびに有益な教示をいただいた。記して謝意に代えたい。

註

- (1) 則天武后(武則天、在位六九〇—七〇五年)が諸州に大雲寺を設置し、『大雲經』(偽經)を備え、僧侶にこれを講じさせた。
- (2) 岸田知子一九七五『則天武后と三教』『待兼山論叢 哲学篇』八、大阪大学文学部、一五—三〇頁
- (3) 『国史大事典』の「国分寺」(井上薫執筆)による
- (4) 奈良時代から平安時代にかけての寺格の一種。官大寺・国分寺・国分尼寺に次ぐ。みだりに私寺の建立とそれによる受益を戒める目的があったと考えられる。
- (5) 梶原義実二〇一〇『国分寺瓦の研究—考古学からみた律令期生産組織の地方的展開—』名古屋大学出版会
- (6) 河野一也・須田誠・向原崇英・浅井希二〇一三『相模国分寺』『国分寺の創建・組織・技術編』吉川弘文館、四〇七—四五〇頁
- (7) 青木敬二〇一二『国分寺造塔と土木技術』『土壁』第一二号、考古学を楽しむ会、三一—四〇頁、以下前稿と略記。
- (8) 奈良文化財研究所・奈良県立橿原考古学研究所二〇一六『薬師寺東塔基壇 国宝薬師寺東塔保存修理事業にともなう発掘調査概報』薬師寺もなう発掘調査概報Ⅲ 興福寺
- (9) 奈良文化財研究所(編)二〇〇二『興福寺 第1期境内整備計画にともなう発掘調査概報Ⅲ』興福寺
- (10) 地耐力的に掘込地業を設ける必要のない地盤環境であっても掘込地業を設ける東京都武蔵府中熊野神社古墳(上田下方墳、七世紀)など、掘込地業と地耐力が必ずしも相関しない例があり、こうした例が関東地方に存在することを念頭に置いている。
- (11) 東・西塔とも版築層に挟まるように小礫が散見される程度で、大ぶりの礫は用いられていない。
- (12) 林正憲二〇〇八『西大寺薬師金堂の調査』『奈良文化財研究所紀要二〇〇八』奈良文化財研究所、一四八—一五三頁
- (13) 中島信親「長岡宮跡第四九〇次(7 ANEDN—11地区)」『長岡京ほか』向日市埋蔵文化財調査報告書第九六集、二〇一三年、八一—一四四頁
- (14) 京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課二〇二一『史跡西寺跡 発掘調査総括報告書』京都市文化市民局
- (15) 京都市教育委員会(編)二〇一六『国指定史跡武蔵国分僧寺跡発掘調査報告書Ⅰ—史跡保存整備事業に伴う事前遺構確認調査(遺構編)—』国分寺市教育委員会
- (16) 石田由紀子・川畑純・神野恵・芝康次郎二〇一三『薬師寺食堂の調査—第五〇〇次—』奈良文化財研究所紀要二〇一三『奈良文化財研究所、一八五—一九六頁
- (17) 奈良文化財研究所(編)二〇一四『薬師寺 旧境内保存整備計画にともなう発掘調査概報Ⅱ』薬師寺。薬師寺十字廊の創建年代は奈良時代後半とみられ、壺地業の内部に礫でなく瓦を敷き込む。この点は薬師寺食堂とも似通う。
- (18) 諫早直人・小田裕樹・星野安治・渡辺文彦・渡辺晃宏・鈴木智大二〇一四『西大寺旧境内の調査—第五〇五・第五二一—』奈良文化財研究所紀要二〇一四『奈良文化財研究所、一四四—一六〇頁
- (19) 大西貴夫・青木敬・金田明大二〇一三『東大寺法華堂の調査—第四九二—』『奈良文化財研究所紀要二〇一三』、一六八—一七八頁
- (20) 南部裕樹(編)二〇一八『東大寺東塔院跡—境内史跡整備に係る発掘調査概報Ⅰ—』東大寺境内整備事業調査報告第一冊、東大寺
- (21) 国平健三一九九八『相模国分僧寺跡』『海老名市史1 資料編 原始・古代』海老名市、六一六—六五九頁
- (22) 奈良文化財研究所二〇〇二『山田寺発掘調査報告』奈良文化財研究所学報第六三冊、奈良文化財研究所
- (23) 奈良国立文化財研究所一九八七『薬師寺発掘調査報告』奈良国立文化

- 財研究所
- (23) 奈良国立文化財研究所一九九三『平城宮発掘調査報告XIV 平城宮第二次大極殿院の調査』奈良国立文化財研究所学報第五一冊、奈良国立文化財研究所
- (24) 青木敬二〇一三「版築と礎」『奈良文化財研究所紀要二〇一三』五八―五九頁
- (25) 岩永省三一九八二「西大寺境内の調査」『奈良国立文化財研究所年報一九八二』奈良国立文化財研究所、四二―四三頁
- (26) 道鏡の出身である河内国若江郡に由義宮を整備し、平城京の副都として造営がはじまったが、称徳天皇の崩御にともない一〇カ月あまりで造営は中止された。
- (27) 八尾市教育委員会(編)二〇一八『大阪府八尾市所在由義寺跡遺構確認調査報告書―塔基壇の調査―』八尾市文化財調査報告八二、八尾市教育委員会
- (28) 磐田市埋蔵文化財センター(編)二〇一六「特別史跡遠江国分寺跡―本編―」磐田市教育委員会
- (29) 上田市教育委員会(編)一九七四『信濃国分寺―本編―』吉川弘文館
- (30) 青木敬二〇一二「掘込地業と版築からみた古代土木技術の展開」『文化財論叢Ⅳ』奈良文化財研究所学報第九二冊、九六―九九〇頁
- (31) 青木敬二〇一六「寺院造営技術からみた白鳳」『國學院雑誌』第一一七巻第一二号、國學院大學、一七三―一七五頁、青木敬二〇一七『土木技術の古代史』歴史文化ライブラリー四五三、吉川弘文館
- (32) ただし、観世音寺金堂のみ基壇最下層に礎を用いることが確認されている。九州歴史資料館(編)二〇〇五『観世音寺―伽藍編―』九州歴史資料館
- (33) 小森紀男・太田晴久一九八六「下野国分寺跡(塔基壇)調査報告」『栃木県埋蔵文化財保護行政年報』栃木県埋蔵文化財調査報告書第八一集、
- 栃木県教育委員会事務局文化課
- (34) 上三川町教育委員会社会教育課(編)二〇〇三『上神主・茂原官衙遺跡』上三川町教育委員会・宇都宮市教育委員会
- 大橋泰夫一九九四『那須官衙関連遺跡Ⅰ』栃木県埋蔵文化財調査報告第一四一集
- 大橋泰夫・木村友則二〇〇〇『那須官衙関連遺跡発掘調査報告』栃木県埋蔵文化財調査報告第二三五集、栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- (35) 大橋泰夫二〇一三「国分寺と官衙」『国分寺の創建 組織・技術編』吉川弘文館、六四―九六頁
- (36) 須田勉二〇一三「国分寺造営の初段階」『国分寺の創建 組織・技術編』吉川弘文館、二四四頁
- (37) 川尻秋生二〇一三「国分寺造営の初段階―文献史学から―」『国分寺の創建 組織・技術編』吉川弘文館、四五―六三頁
- (38) 無論、3期以降でも小礎を混せて版築した堂塔の例がないとは言いが切れないが、後述するように4期に大ぶりの礎を用いる版築技術が各地に移転され、その効果からこの時点で未着工だった堂塔の造営には大ぶりの礎を用いたと解するのが自然である。以上の理解に立ち、小礎が混じる版築の例は、主として1・2期の所産で、下としても3期前までだろう。
- (39) 前掲註(37)、川尻二〇一三
- (40) 山崎信三二〇〇六「平城宮出土軒瓦と信濃国分寺出土土軒瓦」『古代信濃と東山道諸国の国分寺』上田市立信濃国分寺資料館、一―二頁
- (41) 須田勉二〇一三「国分寺造営の初段階」『国分寺の創建 組織・技術編』吉川弘文館、二四四頁。
- (42) 前掲註(29)、上田市教育委員会(編)一九七四
- (43) 津山市教育委員会二〇〇二『美作国分寺跡塔跡発掘調査報告書』津山

市埋蔵文化財発掘調査報告第七二集

- (44) 平野吾郎二〇一六「軒瓦の出土状況からみた遠江国分寺の伽藍造営」『特別史跡遠江国分寺跡—本編—』磐田市教育委員会、二四一—二四八頁

- (45) 三河国分寺金堂も木装基壇外装だが、こちらは基壇版築内に小礫が混じる程度であり、武蔵国分寺塔跡1などと同じである。となると、三河国分寺では金堂の造営が1・2期に着手したようだが、諸般の事情で基壇外装の施工が遅れ、安価かつ素材の入手が容易な木装基壇としたのかもしれない。

- 前田清彦二〇一〇「三河国分寺跡」『愛知県史資料編4 考古4 飛鳥・平安』愛知県、三九六—四〇五頁。

- (46) 榎本誠一九九二「但馬国分寺跡」兵庫県史 考古資料編「兵庫県、七〇七—七〇九頁

- (47) 類例に甲斐国分寺塔や金堂を加えていないが、これは甲斐国分寺以前に造営された寺本庭寺塔・金堂(七世紀後半)でも基壇や掘込地業内に大ぶりの礫を敷き詰めており、この技術系統を受け継いだとすれば1期から当該技術が存在した可能性もあるためである。ただ、寺本庭寺と甲斐国分寺の創建は半世紀以上の時間差があり、直接的に関連しない可能性もあるため、その場合、甲斐国分寺塔・金堂も他の例と同様、4期以降となる。

- (48) 前掲註(37)、川尻二〇一三

- (49) 相模国分寺は、国府所在郡である大住郡でなく高座郡に所在する。その理由の一つとして田尾誠敏は、高座郡の郡領層である壬生氏の本拠地たる海老名本郷遺跡が国分寺に近接する点をあげる。本稿でいう2期以降の郡司層が国分寺造営を主導したと、壬生氏の動向、さらに塔や金堂を先行して整備した相模国分寺の状況とを考え合わせると興味深い。

田尾誠敏二〇一七「相模国分寺と交通路」『古代神奈川の道と交通』藤沢市史ブックレット八、藤沢市文書館、六〇—六七頁

- (50) なお相模国分尼寺金堂では、基壇版築内に大ぶりの礫が大量に敷き込まれており、本稿での検討成果からいえば4期以降の造営を強く示唆する。

國平健三一九九八「相模国分尼寺跡」『海老名市史1 資料編 原始・古代』海老名市、六六五—六九〇頁

挿図出典

- 図1 前掲註(14)、国分寺市教育委員会(編)二〇一六、図版八—四・二四一—八三三。
- 図2 前掲註(20)、國平一九九八、六二九頁、第三八二図。
- 図3 前掲註(20)、國平一九九八、六三二—六三三頁、第三八四・三八五—三八六図を筆者一部改変。
- 図4 前掲註(27)、八尾市教育委員会(編)二〇一八、一四頁、第八図。前掲註(25)岩永一九八二、四三頁図・前掲註(17)、諫早・小田ほか二〇一四、一四六—一五五頁、図III—二〇三〇。
- 図5 前掲註(42)、津山市教育委員会二〇〇二、三二頁、第一六図・前掲註(28)、磐田市埋蔵文化財センター(編)二〇一六、一二五頁、第八九図。
- 図6 前掲註(29)、上田市教育委員会(編)一九七四、図版第四・九・三二—三四。
- 図7 前掲註(20)、國平一九九八、第三七六図を筆者一部改変。
- 図8 前掲註(14)、国分寺市教育委員会(編)二〇一六、七頁、第五図を筆者一部改変。